研究論文および研究発表の概要

【要旨】

序章

本研究では、古代から現在までの psychotherapy を概観する中で、psychotherapy が発展した社会的背景を述べ、日本における psychotherapy から家族療法やブリーフセラピーへの展開を示し、システムズアプローチが生み出された経緯を概説している。そして、本研究の目的として、システムズアプローチの治療効果とトレーニングの現状について調査を行い、面接場面でのコミュニケーションを語用論的に理解するための非言語コミュニケーションの記述法を示すことで、面接場面を俯瞰する視点を獲得するシステムズアプローチのトレーニング方法を提案している。

第一部　先行研究の概観

「第1章　psychotherapy から家族療法へ」では、psychotherapy の起源から精神医学の成立、フロイト Freud, S. によって創始された精神分析について概説している。精神医学が科学を前提とした疾患分類を目的として発展した過程とは異なり、Psychotherapy は神や宗教など信仰に根付いて行われており、民間療法の影響を強く受けていることを指摘している。さらに、アメリカで家族療法が生まれた背景を概説し、社会の変化に対応して、家族療法が人と人との相互作用を重視するようになったことを考察している。

「第2章　日本における psychotherapy の展開」では、日本における psychotherapy の起源から精神医学の成立について概説している。日本でも psychotherapy は信仰にもとづいて行われていた。第二次世界大戦後、アメリカ精神医学に倣って、疾患分類を主とするようになり、この過程において「臨床心理学 clinical psychology」、「カウンセリング counseling」、「心理療法 psychotherapy」という用語が定義づけられ、psychotherapy が医学領域と教育領域において展開し、家族療法が導入された経緯を概説している。

「第3章　システムズアプローチ」では、システムズアプローチと家族療法の区別があいまいで、システムズアプローチが実践報告を主として発展してきたことを概説している。その上で、システムズアプローチを『科学とは異なる新しい「ものの見方」で、人間関係間に生じている現象を「原因―結果」という直線的因果律ではなく、「現象間の連鎖」という円環的思考でとらえる認識論に基づいている。そして、クライエントや家族の人間関係におけるコミュニケーションを重視し、その変化を目的とすることにより、問題を解決する対人援助の技術である』と定義している。そして、システムズアプローチの視点を獲得するための既存のトレーニングに関しては、実践報告がほとんどなく、個々のトレーナーの取り組みに留まっていることを指摘している。

第二部　システムズアプローチの実態調査

「第 4 章　クライエントへのインタビュー調査」では、システムズアプローチのトレーニングに必要な点を見出すことを目的として、システムズアプローチを実践するセラピストの面接を受け、終結したクライエントから、システムズアプローチの効果要因を模索し、トレーニングにおいて重視すべき

点を検討している。その結果、「初回来談時の気持ちとセラピストの印象」、「話しやすさと日常的な会話」、「他の相談者（相談機関）との比較」、「治療構造」の４つを効果要因として抽出している。そして、トレーニングにおいて重視されるべき点として、クライエントの要望を把握し、それらに沿った対応をすること、治療構造を可変的に扱えること、連携機関のアセスメントをすることについて考察している。

「第５章　家族療法及びシステムズアプローチのトレーナーへのインタビュー調査」では、家族療法及びシステムズアプローチを実践しているトレーナーを対象として、トレーニングの実態についてインタビュー調査を行っている。その結果、「トレーニーの自己理解」、「クライエントらの理解」、「仮説」、「初歩的な技術に関すること」、「技法」、「面接全体の組み立て」、「その他」の 7 つのトレーニングにおいて重視されている点を見出している。また、トレーナーごとのトレーニングの違いが、トレーナーの置かれた状況や立場によって異なっていることを指摘し、トレーナーら独自の言語化できない技法がある可能性を示唆している。

第三部　システムズアプローチのトレーニング

「第６章　ロールプレイにおけるシステムズアプローチの視点の獲得」では、ロールプレイという対人援助職の専門家の研修のために使われる役割演技によって、システムズアプローチの視点が獲得できることを検討するため、大学院における１年間のロールプレイのトレーニングに参加した大学院生へのインタビュー調査を行っている。その結果、「面接における初歩的な振る舞いについて」、「クライエントとのやりとりについて」、「トレーニー自身が客観的な視点を得ることについて」という 3 点を見いだしている。そこから、相互作用におけるトレーニー自身の特徴への気づき、自分自身を客観的に観察する視点を獲得できる可能性を指摘している。

「第7章　トレーニングとしての会話分析の形式の試案」では、複数のクライエントを対象とした面接での「セラピストークライエントらの相互作用」を、同時に起こっている現象として提示し、検討することが必要であると考えた。そのため、面接で実際に起こっている相互作用の映像記録に対して観察法を用いて分析し、それを記述するために会話分析の形式に「非言語コミュニケーションを含めて提示する試み」を提案している。その結果、従来の逐語記録では表記できなかった面接場面での非言語コミュニケーションを理解できる可能性を示している。

「第8章　非言語コミュニケーションの『技法』としての視線の使い方」では、システムズアプローチのように、個人だけではなく、複数のクライエントを対象とした面接の場合、セラピスト自身の視線行動が、クライエントや家族に与えている影響も重要である。そのため、実際の面接場面の分析を会話分析の形式を用い、視線に注目して記号として付記する提案を行っている。その結果、セラピストが意図的に視線を用いることによって、クライエントらに対して、変化のためのより自然な働きかけができる可能性を指摘している。そして、セラピストの使う視線がクライエントらのコミュニケーションへの自然な働きかけとして機能する「技法」として使えることを示唆している。

「第9章　システムズアプローチによる集団スーパービジョン・システム」では、システムズアプローチによる集団スーパービジョン・システム（SGSS：Systems approach Group Supervision System）の

試みから、スーパーバイズ事例と、スーパーバイジーへのインタビュー調査結果を提示している。その結果、事例をまとめる際の定式化された書式が自らの事例を俯瞰できる視点を提供できていること、面接が行われている施設や機関、自らの立場などについてより全体を俯瞰したアセスメントの視点が獲得できることを示している。

第四部　総合考察と今後の課題

「第10章　本論文の総合考察」では、本研究の全体について考察を述べている。

日本の psychotherapy のトレーニングは、臨床心理学における専門性の確立と共に、その必要性が提唱されていたが、内容の点からみると、学派ごとの違いがスーパービジョンに影響していた。従来の psychotherapy とシステムズアプローチの違いは、問題の捉え方として明確であることを指摘している。また、従来の psychotherapy が特定の治療理論に拘束されていたことに対して、システムズアプローチでは、セラピストの自由度が非常に高く、この自由度の高さはもろ刃の剣である。これらを踏まえ、システムズアプローチの実践には、コミュニケーションを言語だけではなく、非言語コミュニケーションも含めたコミュニケーションシステムとして観察し、セラピストが自らのコミュニケーションシステムを積極的に使うこと、つまり、コミュニケーションを語用論的に理解し活用することが重要であると考える。

この前提に基づいたトレーニングとして、いくつかのトレーニング形式を提案している。まず基本的な形式としてロールプレイによって自分を含む相互作用を俯瞰するという、システムズアプローチの基本となる視点を獲得できる可能性を示している。そして、日本的なコミュニケーションの特徴である非言語コミュニケーションについては、膨大な非言語コミュニケーションの記述を会話分析の形式で提示できる新しい知見を提供している。これによっていくつかの非言語コミュニケーションの特徴を扱っただけでも、面接の場で起こっていることが理解しやすくなると論じている。加えて、SGSS の実践において、規定されている独自の書式にアセスメントの項目があげられていることから、書式に合わせてケースをまとめる行為自体が、トレーニングとして自らのケースを振り返るという客観的な視点を提供できることを指摘している。そして、他の専門職のスーパーバイズを聞くことにより、俯瞰的に臨床の知識が得られ、自分自身も含めた客観的に治療の場面を俯瞰する視点が獲得されることを示している。

本研究は、システムズアプローチのトレーニングに関する研究であり、システムズアプローチが何らかの特殊な臨床心理学の理論を指すものではなく、psychotherapy として考えることもできる。そして、一見複雑な組織やその人間関係をアセスメントできる「ものの見方」であることを強調するためには、学術的な場面において他の一般的な心理療法との違いを慎重に示す必要があるとしている。精神医学領域や臨床心理学領域などにおいて、システムズアプローチが他の対人援助職のために有益な視点を提供できるという前提であれば、その受け入れやすさを作りだすことが今後の課題であり、より有効なトレーニングの形式を提案できることが必要であるとしている。

【審査委員会の評価】

前言で概要を述べたように、心理療法のトレーニングや訓練に関わる論文は、臨床心理学の研究分野でも比較的少ないのが実状である。あえて述べるとするならば、世界的な標準として普遍的に知られているのは、フロイト Freud, S. が構築した精神分析療法における「教育分析」という手続きが、体系立てられた訓練プログラムとして成立しているにすぎない。また、システムズアプローチの近接領域である家族療法の世界的な組織である AAMFT（American Association for Marriage and Family Therapy）の提供しているトレーニングプログラムにおいても、トレーニングの時間や形式に関する規定は明確にされているが、臨床的方法や技術獲得のために必要な要素は明示されていない。

心理療法のトレーニングプログラムの構築に関わる研究の困難さの一因は、効果的な臨床実践を行う者が必ずしも適切なトレーニングプログラムを提供できるとは限らないという矛盾から生じている。心理療法にはそれぞれ独自の理論や方法論的規程があるが、トレーニングプログラムにおいても、その理論や方法論を獲得するための具体的なプログラムが必要となる。しかし、臨床実践におけるクライエントが必ずしも決まった心理的困窮者ではないため、クライエントごとにオーダーメイドな対応が求められ、臨床技能の獲得のためには、理論獲得や方法論の理解だけでは不十分だからである。加えて、もう一つの要因は、心理療法におけるトレーニングの要点である「関係の構築」という問題がある。その理由は、関係性が不可視であり、科学的前提である量的評価になじみづらく、普遍的妥当性のある評価手法が確立していないからである。また、システムズアプローチは、従来の心理療法以上に多くの人間関係を視野に入れるため、そのトレーニングでどのように関係性を理解すべきか、明確に示すことがより困難となるからである。

本研究では、システムズアプローチのトレーニングプログラムの前提として、心理療法そのものの発展の経緯について先行研究を丹念に検討し、それらのトレーニングプログラムについての記載を検討している点については、評価できる。こうした先行研究を俯瞰する中で、特に心理療法が科学的評価に耐える必要があったことを社会的要請から再考し、心理療法が統制条件を厳しくしたことや、治療における関係の規定を厳密にしてきた経緯について考察していることは、重要な指摘となっている。ただ、この先行研究で重要な心理療法として位置づけている分野に「集団心理療法（グループセラピー）」が抜け落ちていているのが残念である。現在の心理療法の主要な方法論が個人療法中心となっているとはいえ、心理療法の全体を俯瞰しているとは言い難いという問題がみられた。

本研究においてシステムズアプローチのトレーニングとして必要な視点をどこに求めるかについは、「クライエントへのインタビュー調査」と「トレーナーへのインタビュー調査」を行っている。これは、心理療法の効果研究が近年当事者であるクライエントやその関係者を対象として行われることで、専門家が提供したと主張する影響以上に、クライエントにとってはクライエントとの関係のあり方そのものがより重要であるとの研究報告が主流となっているからである。本研究においても、システムズアプローチの治療を受けたクライエントや関係者へのインタビュー調査から、実際の面接でクライエ

ントにとって必要であったと受け取られている視点を再考することによって、その技能をトレーニングに位置づけようとする考え方は、新たな視点として評価すべきである。加えて、システムズアプローチのトレーニングに関与している数少ないトレーナーに対してのインタビュー調査も、これまでに類を見ないもので、これまでにないトレーニングに関する知見を探索しようとする姿勢は評価できる。

本研究で最も重要で有益な視点の提供は、システムズアプローチの実践に必要な非言語コミュニケーションの解釈と活用について、会話分析という定式化された対話場面の分析方法を基本としつつ、微細な非言語コミュニケーションの記号を付記するという形式を提案したことである。これらの提案は、家族療法研究(Vol.26,No.3, pp.256-265, 2009)でその基本形式の提案が評価され、次いで家族心理学研究(Vol.25,No.2, pp.101-112, 2011)でその応用が示され、査読付原著論文として第三者評価を得ている。面接場面で起こっている出来事を俯瞰して解釈するだけでなく、援助者が積極的に非言語コミュニケーションをどのように活用すべきか、その微細な動きが会話分析の中に記号化されることによって、誰でもが容易に非言語コミュニケーションを解釈し、臨床実践に活用できる可能性を提供した点において、これまでにない視点を提供したものである。

加えて、心理療法のトレーニングとして不可欠なスーパービジョンの効率を向上させるための方法として提唱されているSGSS(Systems approach for Group Supervision System)のトレーニングの効果を検討することで、面接の場面設定や展開、治療関係者の要請などを俯瞰する視点をも獲得できることを示している。この研究についても、家族療法研究(Vol.29, No.1, pp.67-72, 2012)の査読付原著論文として公表されている。

本研究の意義は、臨床心理学領域における心理療法の一分野であるシステムズアプローチのトレーニングとして必要な視点を、サービス受給者であるクライエントやその関係者と、多くのトレーナーのトレーニング実態から要因を検討しようとしたことである。臨床心理学が実践的学問である以上、臨床現場に立ち戻ることから研究を始め、そこから必要な視点を検討し、トレーニングに必要な視点を同定した姿勢は、臨床心理学研究にとって不可欠な研究のための視点である。その意味で本研究は、臨床実践の中から必要な視点を検索した点で、今後の発展を含めて期待される研究である。また、システムズアプローチのトレーニングにおいて、自らを俯瞰する視点の獲得、コミュニケーションの語用論的分析、そして非言語コミュニケーションの解釈と活用という側面は、これまで獲得が困難とされていた領域である。多くの研究者により微細な非言語コミュニケーションの理解のために試行錯誤的な研究がなされてきたが、それらは実践研究ではなく基礎研究を超えるものにはなり得ていない。しかし、臨床現場での出来事そのものを対象として、だれでもが容易に理解できるために会話分析に非言語コミュニケーションの記号を付記するという提案は、非常に有益な知見の提供であり、多くのトレーナーからも高く評価されている。特に第三部における 4 本の論文の成果は、いずれも学術的に大変意義あるもので、今後はこれらの論文の成果の関連についての考察を発展させることが、システムズアプローチのトレーニングをより効果的、かつ効率的に実施できるための指針になると考えられる。

最後に、本研究における課題について触れておきたい。本研究は心理療法の発展を丁寧に再

考し、それらにまつわる既存のトレーニングプログラムだけではなく、あえて臨床実践に関わるクライエントやトレーナーが掲げる要点から、システムズアプローチのトレーニングについての新たな提案を行おうとした意欲的な研究であることは認める。しかし、広範な先行研究を考慮するあまり、恣意的な文化論的考察に流される傾向がいくつかの部分でみられた。今後は、臨床実践場面の調査研究から課題を見いだし、その解決の指標を客観的視点から導き出すという科学論文の形式を徹底することが望まれる。そして、恣意的考察に流されないという課題を乗り越えることにより、臨床実践を基礎とした研究を推進する研究者となることが期待できると考える。

よって、本審査委員会は、赤津玲子氏が、龍谷大学学位規程第3条第3項の定めるところにより、博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。

2013 年（平成 25 年）6 月 28 日

主査　吉川　悟
副査　友久　久雄
副査　児島　達美（長崎純心大学）